

■随想

道祖神との出会いとその考察

江添繁和 (高3回)

信州全域の探訪にのめり込む

道祖神といえは、安曇野の風物として、今では誰もが知っている存在であるが、一九七〇年代ころは、民俗学の研究者や愛好家の間でしか知られていなかった。

以前から、名も知らぬ野仏に興味を抱いていて、折々に散見したり、参考文献を探し求めて研究したりしていたの



であるが、或る年、蓼科秋景の写生取材の帰途、ふと思いついて、通りがかりの集落へ寄り道した。



●えぞえ・しげかず
画家。昭和8年、東京生まれ。同20年に松尾に疎開して菁々寮に入寮。武蔵野美術大学油絵科卒。信州の自然風景や野仏などを中心に、毎年、都心や長野県下をはじめ、全国各地で個展を開催している。

秋の日は早く落ちる。北大塩の間際で迷っていると、ちょうど車が出てきたので、声をかけると、青年が顔を覗かせてくれた。「石仏を訪ねて来たのだが……」と言うと、青年は上機嫌な表情で、「よく来てくださった。俺んこのは日本一です。案内しましょう」と、車を逆方向に変えて先導してくれた。

もう薄暗くなり始めていたが、お目当てのものは三尺ほどのもので、男女が互いに肩を抱き、手を握り合った姿で、着流しの裾から出した足を絡ませた姿態が妙にエロチシズムを感じさせた。青年が自慢するだけあって、珍しい見事なものであった。

旅回りの石工が駄賃稼ぎに彫刻したものが、名もなき石工の何と巧みな演出の造形であることか。村の青年が自分の宝物を自慢するかのように対応してくれたその心意気に、すっかり嬉しくなった。

隠れた日本文化がこの山村に息づいているのに出会って、感激したものである。この出会いが原動力となって、遂に信州全域の道祖神の探訪にのめり込むことになってしまった。

「よく来てくださったわね」との微笑み

研究文献を参考にして、二万分の一の地図に印を付け、それを基に、手始めに諏訪周辺山浦等の全域に歩を進めた。とくに印象深かった山浦の道祖神場には、並立して男女のシンボルを思わせる自然石や石造物、また、明らかに縄文の円筒形石柱までもが祀られており、これは時代を隔てて祀られた同系統の性格を持つ土俗信仰なのだという確信を強く持った。数十年後、これらの疑問は解明されるようになるのだが……。

諏訪湖を源とする天竜川沿いの伊那谷は、同じ文化圏である。母校に一九四四年から五〇年まで赴任されていた知人の郷土史家・竹入弘元先生に案内してもらった奥三峰の浦では急な夕立に見舞われて、びしょ濡れになって探し回り、苦勞の甲斐あって、苔むす袖中合掌像の「よく来てくださったわね」との微笑みに出会えたのは大感激であった。

東春近辺の、広大なゴルフ場と化した山林の片隅に取



根周辺にも独特の面白いのが各地にあるのだが……。

下伊那では、高2卒の本多勝一兄の生田の山荘に立ち寄った折、「この辺りにもあるはず」と、細い曲がりくねった尾根道を案内してもらった。中山の辻に、酒器を持ち酌み交わすもので、頬を染めた可愛いものがあつたし、険しい山道の奥の峠にも並立合掌像が祀られていた。

豊丘村伴野付近にもいくつかあるが、小園から段丘をいくつも登った源道路を訪ねた折には、「東京からわざわざおいでたのかね」と、喜んで案内してくれたお婆さん、杉木立の薄暗い内に祀られている肩を抱き合った顔が微笑んで迎えてくれた。

松尾では、小学校の東門を出た小道の脇に、風化して鎮座していた。松尾の同級生ですら知らない存在で、「こんなに珍しい石仏が、こんな所にあつたのか」と驚いて

り残されたままに佇む姿に出会った時は寂しげで、別れは後髪を引かれるような悲しきものであつた。駒ヶ



伊那谷雪景

いた。上殿岡の高4卒の平沢秀明兄宅のは、ユニークな頭巾姿で、有名な「道行」を思わせる優品である。

三穂の立石寺、下條、阿南には、苔むした独特な姿のものが険しい道筋に祀られており、大池の辺りの小道のものは、酒器を持って酌み交わす姿で、女のほうが逞しい造り。下伊那の優品である。

仲睦まじい理想像の造立

広大な県下各地には、それぞれ独特なスタイルをしたものが沢山あるのだが、造立された当時の時代性に想いを馳せる時、厳しい山村の現実生活とは裏腹な仲睦まじい理想像を造立したその心情は、子を授かり、実りの豊かさを期待する切なる願望を表わしたものの以外の何ものでもない。さらに天明の浅間の大噴火による大災害、大飢饉の造立年号のものを見るにつけ、この意味は鮮明に推測できるのではないだろうか。

路傍に佇む土俗信仰である故、その由来は不明である。大方の解説では「古事記」に由来の根拠を求め、賽の神、岐の神、または中国伝来の道の神説などがあるが、何で二人仲良しである必要があらうか。

男女が仲睦まじい姿とは、要するに生殖をシンボル化したもので、子を産んで働き手を増やし、生産力を高め、

種族の維持存続を図り、豊かな収穫を願うものである。これは人間の本能的欲求で、根源的願望でもある。

また、これは古来から、世界各地に見られる地母神信仰と相通じる人類特有のもので、これを具象化したものである。八ヶ岳山麓に開花した縄文文化の代表的出土品として有名な「縄文のビーナス」と称される土偶などは、特に地母神そのものの造型である。

すでに男のシンボルを石像化して祀られたものは各地の遺跡から出土しており、これらの持つ性格は全く同一で、インドのヒンズー神リンガの神格も同様である。

自己流の日本古層文化論

諏訪神の古層の守屋神は狩猟神であり、その祭りの儀式では如実に表現されており、縄文文化の現代に連なる直系の土俗神である。

また、忘れられた存在ながらも、「御社宮寺」と当て字されるミシヤグジ神も各地に残っている。これは石神シャクジであって、ちなみに練馬には石神井公園があり、全国的にも石神の地名は各地に見られる。

道祖神はこれらの最古層の系統に属する土俗神であり、仲睦まじい双体石神像の分布は、信州とその隣接県にとくに多いが、列島の北から南まで、この名称は残存して

いる。九州南端では田神、「タノカンサア」といわれる独特な形態のものがあり、東北ではまた異なった表現である。「金精様」といわれるものも同系のものであろう。

この列島には石器時代人以来、北から、または南から、海流に乗って人々が渡来したのだが、一万年以上ともいわれる縄文時代人の世界に誇れる文化期を経て、その後、大陸からの稲作民族の渡来によって、大陸との交流による文化が発展し、独自の文化が開花するようになるのである。

やがて国家体制が整い、千数百年、万世一系の神の国、天皇の祖先神を中心とする国家神道の体制となり、その統制に属さない土俗信仰の神々は淫祠邪神として、時の権力によって禁止令が出されたこともある。これに抗して、庶民に支持され続けた根強い神であり、大地に根ざした民族神としての性格は揺るぎなく、この国の風土の文化として、伝え続けられるべきである。

時が変わり、今は女性たちにも好まれる仲睦まじい和合の神々として、歳月を越えて路傍に佇み、訪れる人々に微笑みかけてくれる。

日頃制作しながら、信州の山々を、縄文の世界を、また路傍の神々に想いを馳せては、自己流の日本古層文化論をますます膨らませている。